



回ってる時が幸せ独楽だもの

八塚一青

独楽は回るために生まれてきた。回っていない時は死んでいるも同然。回る独楽の気持ちを「幸せ」と代弁した俳人、詩人はこれまで誰もおらんね。



豆を撒く妻に本気の眼あり

小川鈍太

鬼豆を打つ妻の眼がいつになく真剣。それこそ鬼気迫るものがある。妻が討とうとしている鬼とは、実在の人間か世の中の不条理か。深い句だな。



何がめでたい九割廃棄の恵方巻

田中早苗

国連の報告によると、世界では八億二千百万人、九人に一人が飢えに苦しんでいる。恵方巻をおよそ十億三千万円も廃棄処分にした国、日本。



あちこちに霊の漂ふ毛皮店

井口夏子

毛皮のコート製造には数多の動物の命が失われる。コートを着る人は現場を見ていないから実感はない。ニュース以外はフェイクでいいんじゃないの。



お雑煮の餅に入れ歯がついて来る

吉川正紀子

悲劇は第三者には喜劇となることも。しかし、作者はめげず、災難を滑稽なアクシデントとして見事に一句に仕上げた。立派な滑稽俳人である。



足踏みを加え春待つ万歩計

南とんぼ

万歩計のカウンターの数字は、時々、足踏みのズルをして稼ぐ。なあに、どこぞの役人のデータ改ざんに比べれば、これくらいの調整は許されるさ。